１１／２０（月） ウェリントン 日本大使館のブリーフィング・夕食会

以前沖縄担当大使を務められ、当会活動にも積極的にご参加いただいた、髙田 稔久・駐ニュージーランド特命全権大使は日本に公務で出張中だったが、ご配慮により、日本大使公邸にて当地の概要についてブリーフィングをしていただくとともに、その後引き続き夕食会を開催いただいた。

当日は、同時に当地を訪問された千葉県市原市長ご一行や、ウェリントン日本人商工会の方々も同席され、楽しいひとときとなった。また、沖縄戦で自決した大田実海軍司令官の四女のオーモンドソン＝大田・昭子氏が当地に居住されており、夕食会にご参加いただいた。沖縄に来られたこともあるとのことで、旧交を温めた参加者もいた。

お開きの後、双方の希望者が市内のパブに行き、沖縄のオリオンビールを楽しんだ。

１．中井 一浩 公使（当日の臨時代理大使）のご挨拶

ニュージーランド（以下、ＮＺ）経済は堅調である。先週のＡＰＥＣでは、ＴＰＰ１１の立ち上げにめどが立ったが、そこで日本とニュージーランドが果たした役割は大きかった。

観光面でも日本とのつながりは強まっており、沖縄ツーリストもクイーンズタウンでレンタカー事業を開始される。

今後、ラグビーワールドカップ、オリンピックと日本で開催されるが、ニュージーランドは人口に比してスポーツが強く、スポーツを通じた両国の関係強化も期待している。

２．玉城代表幹事挨拶

沖縄県は日本の南の果てともいえる一方、アジアやオセアニアから見ると、最も近い日本ともいえる。自立型経済、観光立県に向け、今年はＮＺを訪問した。

３．中井 一浩 公使 による当地の概要についてのブリーフィング

日本の４分の３の国土に、日本の２７分の１の４７６万人が住む。民族構成は、欧州系７０％、マオリ系（先住民）１４％、アジア系１１％など多民族国家である。

２０１７年１０月に労働党とＮＺファースト党の連立政権が発足し、３７歳女性のアーデーン首相が就任した。ＮＺでは最高裁長官も女性である。緑の党とは閣外協力し、国会の過半数を確保した。ＴＰＰに抵触しない形で外国人による住宅購入を禁止する国内法を検討している。

日本との関係は全体的に良好であり、民主主義・人権・自由貿易等の共通の価値に立脚した「戦略的協力パートナー」である。日本からの渡航者は年間約１０万人で、ＮＺからも北海道を中心にスキー目的の訪日が増加している。日本への輸出額が３０億ドル（農林

水産品が６４％)、日本からの輸入額は３５億ドル（自動車等の輸送用機器が６０％）で、日本は中国、豪州、米国に次ぐ第４位の貿易相手国である。

経済面では、一次産品輸出に依存しているが、移民増による消費増などによりＧＤＰが年３％成長して堅調、年間１人あたりで３８千米ドルで日本と同程度である。

２０１７年７月までの１年間で、ＮＺへの短期訪問者は前期比９．５％増の３６６万人、移民は５％増の７２千人、ともに過去最多となった。

英国のＥＵ加盟を機に、アジア太平洋地域諸国との関係を強化しており、２００８年に中国とＦＴＡ（自由貿易協定）を締結し、ＮＺへの移民も多い。

大使公邸にて　渕辺副代表幹事の右がオーモンドソン＝大田・昭子氏

市内のパブの黒板
オリオンビールがありました

ニュージーランドにおける中古車市場について

視察に行く数週間前の経済同友会国際委員会において、「中古車輸出ビジネスモデル実証事業」の講演があり、沖縄県のベースカーゴの構築による海上運賃の低減等を目的に活動していることに興味を引きました。
沖縄県は、物流において運賃の高い航空輸送・海上輸送の輸出入のアンバランスからコスト高およびリードタイムの長期化が課題である。
本県の産業振興、特に域外との物流が重要となる県産品の出荷拡大や原材料の安定的調達を促進するにあたって、ベースカーゴとなる貨物の創出がもとめられ、その候補として、３万台余の活用されているレンタカーの内、年間約１万台レンタアップされる中古車を海外へ直接輸出できないか注目されている。
そして、その輸出先として左側通行で自動車メーカーは無く、すでに日本車のシェア 75%（新車・中古車含む）以上を占めるニュージーランドが魅力的な国のひとつであるとの報告でした。ちなみに２０１６年の日本からニュージーランドへの中古乗用車の輸出台数は約１３万台でした。
しかしながら、安定的に輸出を行うには多くの課題がありそうですので、今回の視察で確認していきたいとの思いが強くなりました。

１１月１９日（日）１２時、那覇空港から成田空港へ向かい、オークランドに１０時間かけて成田空港から飛び立ちました。当地で国内線に乗り換え、最初の訪問地ウェリントン空港へ翌日の１２時に到着しました。すると空港ロビーにヒュンダイの新車２台の展示が目立っていました。聞いたところ、最近アジアからの移民も増えている。特に中国や韓国からの移民が多いとのことで合わせてそれぞれ自動車メーカーの売り込みも積極的とのことでした。日本車の展示がないのでやや不安になりましたが、観光バスで町にでると走っている自動車は日本車が目立ち、特にタクシーのほとんどがプリウスのように思われました。現時点、高い費用をかけて展示しなくても、日本車は売れているように感じ安心しました。

翌日、クィーンズタウンへ国内線で移動し、今回視察の重要イベントである、経済同友会副代表幹事でもあります東会長が経営されている OTS レンタカー・ニュージーランド支店の開所式に出席しました。
クィーンズタウンという町に支店をオープンするのですが、町自体が急拡大しているようで中心地には土地が見つからず、郊外への開設となったようですが、様々な業種の店舗の建築ラッシュと重なり、開所式に間に合わせるため、普段残業までしないお国柄のようですが何とか頼み込んで対応したと聞きました。この店舗のある場所もあっという間に大きな町に生まれ変わるような勢いを感じました。
また、南島最大都市クライストチャーチに２号店をすでに計画しているようです。ふたつの店舗のコラボで観光客は安心してレンタカーを利用できるスキームを考えているようで「先見の明」を感じました。

ＯＴＳレンタカー営業所にて
よく見るとロゴが沖縄と少し違います

日本の排ガス規制適合ステッカーが貼られたＯＴＳレンタカー　トヨタＣ－ＨＲ

クィーズタウン中心地からミルフォードサウンドのフィヨルドクルーズの港まで数百キロの移動距離があり、しかも走る道路は世界遺産の中なので建物はほとんどありません。場所によっては、携帯電話も圏外となりつながりません。自動車の故障やガス欠は、普段のドライブよりリスクが高くなっていると思われますので両店舗の連携した対応は、レンタカー利用者にとって非常に安心できる運営と思われます。
実際、私たちがミルフォードサウンドへ移動している途中でも２か所で観光バスが故障で止まっておりました。「暗黙の了解」なのか私たちが乗車している観光バスも一旦停車し運転手は、故障したバスの状況を確認していました。場合によっては、故障しているバスの乗客を乗せることもあるようです。（ちなみに今回、私たちのミルフォードサウンドまでの往復の観光は、一日で６００キロ以上のバスの旅でした。）

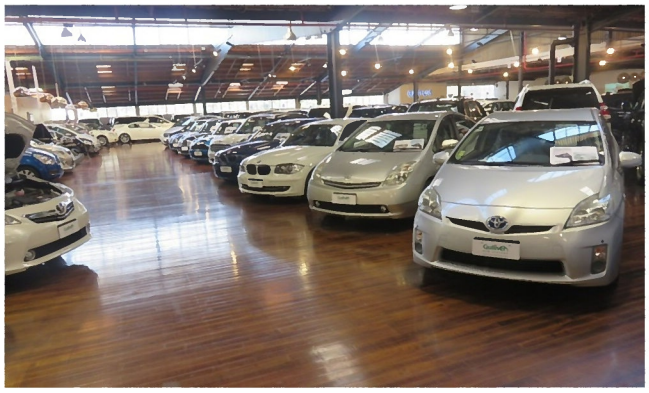
最後の視察地オークランドに戻り、２０１４年１１月にニュージーランドへ進出したガリバー・ニュージーランド社を訪問し、現地での中古車販売の状況をヒヤリングしました。
ご存知のように日本 NO1 の販売実績を誇る大手中古車ディラーガリバー社のノウハウや苦労話は大変参考になりました。

ヒヤリング内容

1. ２０１５年８月、当初目標のオンライン契約台数月間５０台を達成し、２０１６年３月に面積を１０倍の広さにして２号店をオープン、月間目標３００台を目指している。
2. 販売スタンスは、移民の多い国であるため多民族国家という特徴があり、２か国以上の言語が話せる従業員を採用している。それぞれ出身の国の文化・価値観の違いからクレ

ームの内容も日本では想定できないようなものがあるが、できる限り対応し当地での信用を得る努力をしている。

3. 中古車には厳しい検査基準
   検査内容の一例として、自動車室内パネルをすべて剥がしての骨格ダメージや修理跡・錆の有無確認または、車体下のチェックでは錆防止や防腐剤処理している場合、すべて剥がし確認される。
   タイヤの摩耗チェックも日本では問題ないと判断されるものも、当地ではアウトのケースが多々ある。
   結果、検査が通らず車体を日本へ戻すこともありコストがかかる。
   過去に中古車の整備不良や走行距離のごまかし等、不正が原因と思われる大きな交通事故がトラウマになって、現在の検査内容になったのではないかと推測される。
   加えて、外来動植物の侵入防止の検閲も厳しく、植物の種や昆虫等卵の有無のチェックもある。
4. 日本車の品質の高さや日本国内での検査体制の正確さを理解してもらい、現地検査の簡素化を訴えたい。その結果としてお客様へ安く中古車を提供できるのではないかとの思いを持っているとのことである。
   しかしながら、最近の三菱自動車の燃費偽装や日産自動車の新車無資格審査や神戸製鋼の強度データ改ざん事案等が、日本車の信頼を失い中古車販売に対し悪い影響が出るのではないか危惧している。
5. ニュージーランドでは、車検や自動車税および点検整備の期日がバラバラであり期間経過のまま自動車を使用している人が多いと聞いている。当社は、購入者に対し、その期日案内や車検・自動車税支払期日をまとめ、安心して自動車を運転できるサービスを提供している。
   しかしながら、国民性の違いからか「壊れる前の整備」より「壊れたから整備」の考え方が根強く、日本式のきめ細かい整備への信頼性がなかなか高まらないジレンマがある。



右ハンドルの日本車やドイツ車が並ぶ店内

検査のため内張りを外し、車体をチェック

内田隼太代表から熱い思いの伝わる解説をありがとうございました。
当地での更なる活躍を期待したいと思います。

まとめ

日本国土の 3/4 の面積に人口は約 476 万人（日本の約 1/27）のニュージーランドの今後を考えると大きなビジネスチャンスがあるように思えます
特に中古車市場は、人口の増加と道路の整備が進むとさらに拡大することが予想されます。その根拠として、今年９月の総選挙で労働党が４期ぶりに政権をとり、若干の混乱はあったものの移民政策による人口増は今後も続くと予想される。
鉄道網は、貨物輸送を中心としており、旅客輸送は減少傾向である。政府による支援も消極的である。結果、自動車による交通手段が中心となるため、自動車の需要はさらに増大すると思われる。
中古車をニュージーランドへ安定的に輸出をしていくためには、厳しい検査をクリアする体制の構築など課題はありますが、沖縄県の産業振興を進めるためにもベースカーゴの一つとして積極的に対応していくべき取引です。
沖縄から直接、レンタアップされた中古車が、様々な課題を克服しニュージーランドの港に陸揚げされる光景を早く見たいものです。

ミルフォード・サウンド視察記

11 月 22 日(水)は、終日かけて、ニュージーランド随一の景勝地ミルフォード・サウンドを視察した。ミルフォード・サウンドは、フィヨルドである。サウンドとは、英語で入り江を意味し、詳細には川の水の氾濫によってできた地形を指す。フィヨルドは、氷河の進退によって削られた岩山に氷河の溶け水や海水が入り込んで形成される地形であるが、発見当時の人々の地理の知識や、言葉の知識がなかったためにサウンドと名付られた。

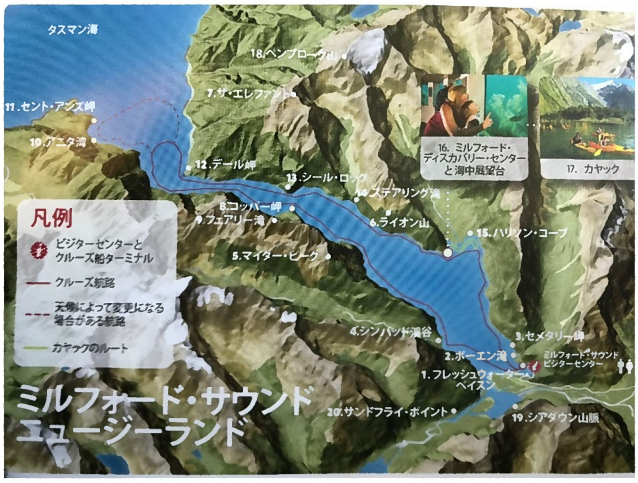
実際に視察してみて、言葉を失うほどの雄大な自然と、観光産業の活況を見て、我々沖縄経済同友会としてはやんばる観光の未来の形を見たように思う。以下、時系列と写真で視察状況を報告する。

---

11 月 22 日(水)午前 7:30、貸し切りバスでクイーンズタウンを出発。長距離のバス移動の末、午前 10 時に世界遺産フィヨルドランド国立公園の入り口に達し、環境保護省のビデオ学習を受けた。フィヨルドランド国立公園には、世界最南端のブナ原生林が新潟県のサイズで広がっているという。

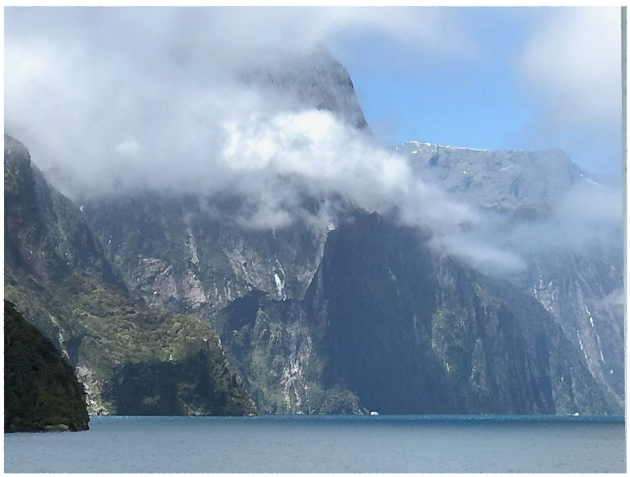
そこから先、ミルフォード・ロードに沿ってバスを進めた。ミルフォード・ロードは、川の清流とルピナスの花が非常に印象的。ロードオブザリング、ミスティマウンテン、エイリアン、アバター新作、等々の映画の撮影地になっている。ニュージーランドで映画産業が大きな産業となっている。また、ニュージーランドでは、天敵がおらず鳥が飛ばなくなったが、そのあと、人間の手で哺乳類が入ってきた、そのため、生態系危機が危機に瀕したという。

13:30、念願のミルフォード・サウンドに到着し、フィヨルドクルーズ出発地に降り立った。フィヨルドランド国立公園内には他に 13 のフィヨルドがあるが、同様の理由でサウンドと名付けられている。ミルフォード・サウンドはタスマン海から 15km 内陸まで続いており、1200m 以上の断崖絶壁に囲まれている。ミルフォード・サウンドは、年間 7000-8000mm もの降水量があり一年の 3 分の 2、およそ 230 日は雨が降る。沖縄経済同友会は、日ごろの素行が極めて良いため、この日は地元ガイドも驚くほどの晴天であった。

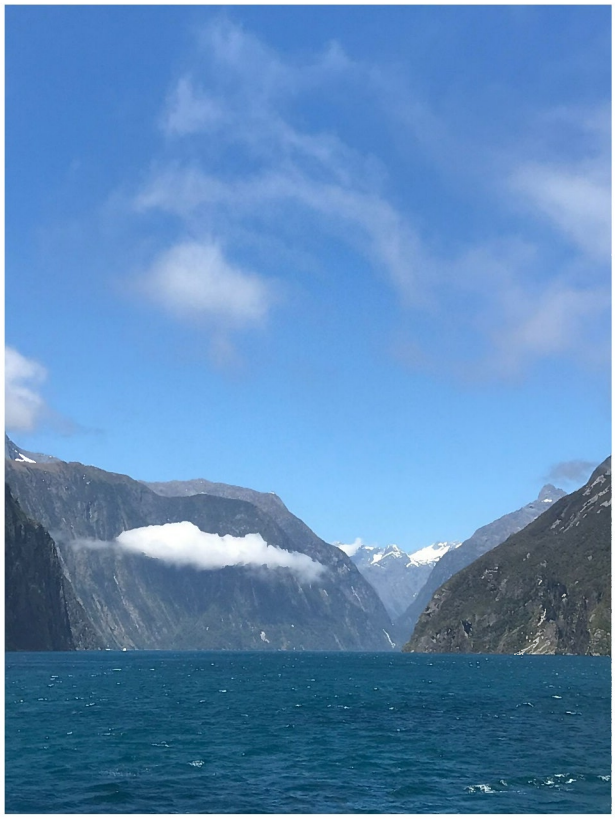


13:30 から 2 時間、クルーズ船でフィヨルドの湾内を見学。ミルフォード・サウンドで最も人気のアクティビティは、この観光船によるフィヨルドクルーズである。観光船はミルフォードサウンドの内陸側先端に位置するフレッシュウォーター湾を出港する。大型船でフィヨルドを周遊するクルーズや、約 3 時間かけて小型船で自然と野生動物を観察するネイチャークルーズ、夕方に出港し翌朝まで船内泊するオーバーナイトクルーズなど、時間帯や運営者により種類は様々である。大型客船には飲食を提供する施設が整っており、船内での食事が通常クルーズとパッケージされている。我々沖縄経済同友会は、船上で和食弁当に舌鼓を打った。

ミルフォード・サウンドで最も有名な山は標高 1800m のマイターピークで、ニュージーランドを象徴する景色としてガイドブックやポストカード、土産品、その他ポスターなどのイメージとして使われる。マイターピークは海水面から直接そそり立つ山としては、世界で 2 番目の高さを誇る。ミルフォード・サウンドから見られる最も高い山は、2300m のペンブローク山で、通年山頂に氷河が見られる。
この氷河の雪解け水は、ミルフォード・サウンド内で見られるボーウェン滝やスターリング滝を形成してフィヨルドに流れ出る。この自然の美しさに惹かれて、毎日何千人もの観光客が訪れる。



ミルフォードサウンドでは、雨天時には数千もの滝が見られる。しかし、これらの滝は快晴時には涸れてしまい、恒久的に見られる滝は、たったの 2 本である。一つは 160m のボーウェン滝、もう一つは 155m のスターリング滝である。どちらも山頂（ペンブローク山）に残っている氷河の雪解け水が作り出す滝である。この氷河も 2040 年頃までに完全に溶けて消滅すると言われており、これらの滝も見られなくなるかもしれない。滝には若返り効果(育毛効果？)があると言われており、我々沖縄経済同友会一行のなかにも必死に滝を浴びようとするメンバーが若干名見られた。



15:30 にはバスでクイーンズランドへの帰路についた。

以　上